1．「起業教育の重要性」

大阪商業大学　学長　谷岡 一郎

「起業」とは文字どおり業を起こすことです。長い間、戦後日本のお家芸と考えられてきました。今、そのお家芸の地位が危うくなりつつあります。釈迦に説法かもしれませんが、俗に BRICS と呼ばれる、勢いの激しい国々をはじめ、多くのライバル国が日本から学び、そして日本を超えようと努力しているからです。

幸い、日本人は他の国々があまり持っていない、起業に重要な素養を持っている国民です。まだまだリードし続けることができる、という意見も聞きますが、少なくとも今のままではダメです。放っておくとジリ貧で、他国に追い抜かれるのは時間の問題と考えてよいでしょう。

スピリット、そしてノウハウ

これは自論で、くり返し主張していることですが、起業家が持つべき素養はまず、「スピリット(精神)」であるべきだと考えています。つまり、アイディアや方法論の前に、「世の中に新しい物を送りたい。そして世の役に立ちたい」という気概を持ち、実際に推進していくパワーの源もなくてはならない。それらを総称してスピリットと呼んでいるわけです。

このスピリットにはもうひとつの意味が含まれます。それは、失敗した時にくじけず、次のチャンスを掴もうとする気持ち、すなわち不屈の精神です。

人間性が一番出るのは、成功した時ではなく、失敗した時なのだとする考え方は別の著作で展開したことがありますが、まさにそうなのです。一度や二度の失敗でめげて、「ああオレは起業に向いていない」などと考えるのは大間違い。そういう人々は、向いていない人というより、そもそもスピリットが充分に育っていないのです。

しかしスピリットだけでは何も進みません。そこで重要になるのが具体的なアイディアと、それを推進するノウハウ（方法論）でしょう。起業教育が最も力を発揮する部分でもあり、それがゆえにこのような報告書が必要とされる理由でもあります。起業教育研究会が発展し、効率性と質の高いシステムを作り出すこと、そして優れた人材を世に送り出すことを期待しています。

高校生までの起業教育では、発想やアイディアに重点が置かれますが、それは興味と夢をスタートさせる意味でそれでいいと思います。しかし世の中とはそんなも

のではなく、そのうち実践的テクニックの必要性に気づくでしょう。方法論の修得はその時すればいいのです。たとえば大学でそのようなコースや授業を学べば良いのです。

起業家はまず立派な人間であること

ここに至って、忘れてならない重要なことがあります。それは、「スピリットを持ち、良いアイディアとそれを具体化する方法論を学んだとしても、それらは必要条件にすぎない」という点なのです。では充分条件は何か。

充分条件を満たすために必要なものは、3つあります。それは「起業するための資金」、「皆がついて来るリーダーとしての素養」、そして「運」の3つです。

「資金」については個別の事情にまかせます。ここでは言及しません。次の「リーダーとしての素養」とは、早い話が皆に信頼される人間であるか否か、ということです。起業家は人間として立派であること。これが隠されたもうひとつの重要な条件という意味です。つまり、起業教育の前提として、リーダーたる人間として必要な立居振舞いも身につけていてほしいのです。

「運」は本人にとってどうしようもない要素ですから、教育システムで処理しうる問題ではありません。ありませんが、あえて加えるなら運は順に巡ってくるものだと信じてほしいものです。「人事を尽くして天命を待つ」という言葉がありますが、この言葉を逆から解釈するなら、「人事を尽くさない者には、永久に天命は下らない」のだということでしょう。人事を尽くしてチャレンジを続けられるなら、ツキ夜の晩に出会うこともあるものなのですから。

自分の頭で考えるくせ

画面をクリックすれば、どんな情報でも大量に得られる世の中において、リーダーシップの力の源は知識そのものではありえません。知識ではなく別の要素に、本当の意味での起業家―スピリットやアイディアだけでなく、人がついて来るリーダーシップのある人―になるための心構えがあります。それは「自分の頭で考えるくせ」を持ち続けよう、という気持ち（そして習慣）です。

すべからくリーダーたるべき人間は、まず受け身（指示待ち）であってはなりません。自分で考え、自分で決め、そしてそれを実行する能動的な人間であるべきです。その点で起業しようという意志を持つだけで、その者はリーダーへの道を踏み出したとも言えるのかもしれません。

この研究報告書が、将来において日本の元気を取り戻す一助となることを信じております。関係者の皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。